



経営の散歩道

川中経営研究所
所長 川中 清司

▼福井県選出の代議士・堂森芳夫さんは医者の出で、私も子供の頃からみてもらったり、社会科学研究会などで一緒だったりして親しかった。

いつか選挙の最中に専門店会の歌まつりがあった。その幕あいに壇上にあがってあいさつするように勧めたが、堂森さんは「恥ずかしいなア」と言っ

断った。
勧めてくれるのはうれしいが、いくら沢山の人が集まるからといって、歌と政治とは場がちがう、というけじめのつけ方にすがすがしい信頼を覚えた。

堂森さんは当選九回、議員生活二十七年のあとホテルの一室で独り淋しく亡くなった。

▼今の政治家には恥じる気持ちがなくたってしまった。それが金銭感覚を麻ひさせ、けじめを失わせた。

政治にはカネがかかるというかし「かかる」のではなく「かける」のだ。

「株をもらって何故悪い。政治には金があるんだよ金か」とうそぶいた代議士もいた。

法にふれないから良い、検察が対象にしないから良いという秘書になすりつけ自分は政治家としての結果責任をとうとうとしない。

俺が悪いんじゃないゾ。選挙で勝てばミソギはすんだ。そういう政治家に「恥ずかしいくない政治」を期待するのは無理だろう。



▼「権力と富と名の三つをほし

いままにする」——それが今の政治家のようにみえる。
マックスウェーバーは政治家の資格として「神につかえる気持ち」をあげている。そこまでは求めたくないが、その質がだんだん小さくなっている。哲学がなく、政策・ビジョンがえがけない。

国家の大きな方向を決めるのが国会で、その細目を決めるのが役人のはずなのに、いまは逆

になってしまっている。
▼順番待ちで大臣のイスが廻ってくる。勉強しなくても七回も当選すればよい。だから派閥にしがみつき人脈の中を泳ぎカネづるをあさる。

大臣になれば役人がチエをさずけてくれる。国会質問の主旨はあらかじめ通報され役人がその答弁書をつくる。本場でむづかしくなると、政府委員に答弁させます」と逃げる。

▼政権交代がなく自民党の政権が長く続くなかで、国民に一党独裁でないという印象や、政策が変わったというイメージを高

第三十一回

政治とカネ

める必要があり、そのために派閥の存在が欠かせない。五大派閥などは政党に匹敵するぐらいのカネを準備しなければならなくなつた。

▼国情が長く安定していたので小さなことの論議だけでいればよかった。

一党支配が長くつづき、結局は数で勝ち、論議は形だけのものに終わった。

野党は所詮、数で負けるから具体的政策をもちだして戦おう

とせず、反対野党でこてこ通つた。むしろ主義や思想を論ずる方が経済実務を論ずるよりも次元が高いという風潮もあった。
▼権力の三すくみともいえるべき悪循環がある。政治と行政と業界のゆ着だ。

政治家が法律をつくる→官庁機構が許可認可権をにぎる、行政指導権をふるう→財界や業界はカネで政治家を買収する——という仕組みだ。

日本では財・業界は政権をにぎる自民党と大きな派閥にカネを贈って、その効果を求めるのはむしろ当然の構図となつてい

る。
▼政治家の資金は個人費用も公の費用もドンブリ勘定になつてい

る。冠婚葬祭にカネがかかりすぎる。一組二万円、月百万円がスピーチや花輪づきで消える。会費千円でバスを連ねて温泉に行く×後援会のツケも廻つてくる。

国民の側にも責任がある。政治家に頼めば何でもやってくれるという、オモライ根性を直さないといけない。

いま議会開設百年。
「その国の政治はその国の民度の水準である」という、マックスウェーバーのことばが耳に痛い。